

## 序 論

- 先月末に持たれた「子ども夏期学校」のために頂いたお祈りとご協力に改めて感謝したい。
- 「お祭り」も含めて、毎年、祝福に満ちた素晴らしいときであり、今年も例外ではなかった。
- 今年は、バイブル・タイムとしては、旧約聖書の人物であるダニエルとその3人の友人たちの生き方、生きざまから、この世に生きる信仰者のあるべき姿を三日間にわたって学んだ。
- そこで、今日から3回にわたって、この礼拝で私たちも、子供たちと同じ三つのストーリーとレッスンを学びたい。その三つとは、
  1. 第一は、王様のテーブルから運ばれてくる食事を断ったダニエルと友人たち
  2. 第二は、王様の造った金の偶像を、命をかけても拝まなかったダニエルの友人たち
  3. 第三は、ライオンの穴に投げ入れられても信仰の姿勢を変えなかったダニエルについて
- そこで、これらの出来事の背景、特に1、2話の背景を簡単に説明したい。
  1. ダニエルと友人たちは、言うまでもなく、ユダヤ人であった。
  2. ユダヤは、バビロンとの戦いに敗れ、その属国となった。たくさんの人々が捕虜となった。
  3. バビロンの王は、ネブカデネザルと言う暴君であったが、彼の占領政策の一つは、属国である、ここでは、ユダヤであるが、その国の優秀な人物を一般の捕虜の中から選び、自分の側近として使うことであった。
  4. そのためには、その選んだ者たちを、肉体的にも、文化的にも、様々な意味で訓練しなければならなかった。5節によると、そのような訓練は3年間ほど続いたようである。
  5. それらの人物たちが何人いたかは分からないが、ダニエルとその3人の友人たちは、その選ばれたユダヤ人たちの中に入っていた。
- さて、本日の聖書箇所の直接的背景は、このような訓練プログラムの一環として王様が設けたダイエット・プロジェクトである。

## 本 論

- I. **今日から、ダニエルとその友人たちの信仰者としての生きざまを学ぶにあたり、まず、その意義と重要性について、簡単に触れたい。**
  - A. **それは、彼らが、ユダヤ人でありながら、捕虜として、バビロンの国に連れて来られ、しかも、政府のエリート管理職に至る出世街道を走る器たちとして選ばれ、登用されたことである。**
    1. バビロンの国とその王は、彼らから言うなら信仰的には異教であった。
    2. しかも、今の日米を始めとする多くの国々のような政教分離ではない。政治の中にもろに宗教が入ってきた時代である。
    3. 昔の日本のようにバビロンの王はその宗教のトップであった。
    4. 彼らは、その中で生きた人であり、しかも、その中で、片隅に生きた人ではなく、その社会の中核で生きた人々であった。
  - B. **これは、私たちのクリスチャン生涯に、ピッタリと当てはめられる。**
    1. 私たちクリスチャンも、特に日本人の場合、周囲をみると、ほとんどが無神論者も含めて、「異教」の社会である。（今は、アメリカでさえ、そうなりつつある）。
    2. しかし、私たちクリスチャンに求められていることは、先週も学んだように、
      - (1) そこから、逃げるのではなく、世から隔離して生きることではなく、
      - (2) その真ただ中で生き、そこでクリスチャン生涯の証しを建てることである。
    3. ダニエルと友人たちは、その良い模範であった。即ち、私たちは、彼らから、異教社会に生きるクリスチャンとしての歩み、生き方を学ぶことができるのである。
- II. **次に、今日の直接背景であるが、ネブカデネザル王の、この「ダイエット・プロジェクト」が、ダニエルたちには問題となった理由について考えたい。**
  - A. **ネブカデネザル王は、アシュベナズと言う、日本で言うなら、宮内庁長官のような人物に、このエリート集団の青年たちに自分の食卓に上ると同じメニューの食生活をさせるように命じた。**

1. 王様の食卓と同じメニューとは、何と豪華で、美味しく実に栄養満点なものであったであろうか?! しかも、それが毎日、毎食だというのである。
  - (1)何という光栄、祝福か!?
  - (2)誰が、この特権を断るだろうか!? エンジョイと言いたい。
2. しかし、このダイエット・プロジェクトの一番の目的は、後に、アシュペナズ自身が出ていることから明らかなように、彼らの健康と壮健さのためであったと思われる。
  - (1)10節参照
  - (2)王は、容姿端麗、高知能だけでなく、壮健な体を持つ、肉体的にも強い男を求めていた。そのことは、ITの時代とは違う、古代社会を考えると頷ける。

**B. しかし、このダイエット・プロジェクトは、ユダヤに伝わる信仰、今で言うクリスチャン信仰を持つダニエルと友人たちにとっては大きな問題であった。**

1. 彼らの信仰から言うと、王の食卓からの物は食べてはならないのであった。それゆえ、彼らはそれを断る決断をし、その旨をアシュペナズに伝えた。
2. なぜ、彼らは、それを断ったのか? なぜ食べてはいけなかったのか?
  - (1)一つの可能性はその中に旧約聖書で言う「汚れた食べ物」が入っていたからと思われる。
    - それらは、例えば、豚、貝類などである。
    - ある人々は言う。これらは、昔、まだ、食料保存の技術が十分でなかった頃に、私たちが病気から守るための衛生上の問題からだ。
    - いずれにせよ、旧約聖書の禁じているそのような食物が王の食卓からのメニューには入っていたので彼らはそれを食べなかったと言える。
  - (2)或いは、昔、バビロンだけではないが、異教国の王は食べる前にまず食物を神前に捧げ、それから食べたところに問題があった。
    - ユダヤ人たちの目には、それらの食物は、異教の神々に捧げて汚れたものであった。
    - パウロは後にローマ14章、第一コリント8章等で、新約のクリスチャンとして、それは信仰の本質ではないから、それで裁き合ってはならないと言っているが、
    - それは、イエス様の十字架の福音が明らかにしたことであったのでダニエル当時の旧約聖書時代の信仰者にとっては、律法を守ることが最重要時であった。
3. 即ち、ダニエルたちが、王の食卓から届けられる豪華な食物を拒んだ理由は、一言で言うなら、神様のみ言葉への服従であった。そのために、彼らは王の命令にも屈しなかった。
4. 私たちの人生や生活においても、同じようなことがある。学校で、勤め先で信仰に生きようとするなら、しばしば信仰者の良心に反することを求められることがある。
5. そんなとき、私たちはどうするか? 世の中では信仰は通用しないから、仕方ないと妥協するか? それとも、・・・ダニエル達はどうしたか?

**II. ダニエルたちは、異教国で、異教の王に仕える上で直面したこの最初の問題にどのように対処したか?**

**A. 第一:決断である。彼らは、断固として「断った」。8節 その為に具体的に彼がしたことは:**

1. 「心を定めた」:自分の中で、ハッキリとその問題に対する態度を決めることである。
  - (1)人生で一番悪いことの一つは、ウィッシーワッシーな態度である。どっちつかずの態度である。
  - (2)それは、言うまでもなく、人に対して最悪である。(例:コウモリは動物?鳥?)
  - (3)しかし、神に対しても同様である:「あなたは、志の堅固な者を、全き平安の内に守られます」(イザヤ26:4)
  - (4)あなたの信仰の、人生の「旗色」をはっきりとしなければならない。旗幟鮮明である。
2. 彼らがした第二のことは、その決断を実行したことである。
  - (1)彼らは、宦官の長、アシュペナズに具体的に願いに行ったのである。
  - (2)それは、中々勇気のいることである。自分のことに人は意外に勇気・大胆であるが、信仰のためにも勇敢でありたい。

**B. 第二:知恵であり、策略を用いること 11~13節**

1. それは、彼らが「食べない」と言ったので、王様の怒りを考えて困り果てていたアシュペナズに彼らがした提案の中に見られる。
2. その提案とは、「私たちは、王様のくださる食べ物は食べません。野菜と水だけをください。それを10日間ためさせてください。それで10日後、私たちと、ほかの人々とどっちが健康か比べてみてください。」と言うものであった。
3. その提案が意味することは、
  - (1) 彼らの愛と配慮であった。信仰に熱心であるということは、ガムシャラやムチャクチャを意味しない。相手(関係する人)に迷惑がかからないようにという愛と配慮がある。
  - (2) 彼らの知恵と策略であった：どうすれば、信仰を理解しない人でも、受け入れ、納得してくれるか、知恵を絞って作戦を練ることである。
    - 考えるクリスチャン、賢いクリスチャンにならなければならない。
    - 先週も引用したが、パウロは言う。「悪事においては幼子でありなさい。しかし、考え方のにおいては、大人になりなさい」Ⅰコリント14章20節
    - イエス様も言われた。「鳩のように素直で、ヘビのように賢くありなさい」と。

### C. 第三:それは、信頼である。

1. この信頼については、ダニエル書1章に、明確に書かれていない。当然のこととして、ASSUME されていることである。
2. しかし、信仰なくして、こんなこと願い出たり、大胆に提案することはできない。後で、関係する人々に、迷惑をかけるだけである。
3. ダニエルと友人たちは、神様を信じていた。「神様が必ず、野菜と水だけでも、肉をたらくふく食べている人たちよりも、元気に強くして下さる」と信じていたのである。
  - 彼らは決して菜食主義者ではなかった。
  - 今のようなダイエットに関する知識や理解があった時代ではない。
  - 旧約聖書の文化を見る時、どこまでも「野菜」は、経済的貧しさと栄養の乏しさの象徴であった。
  - だから、アシュペナズの反応にもあったように、誰が聞いても、「菜食」対「肉食」は「肉食」であった。
  - それ故、これは奇跡、神様の奇跡的介入なくしてあり得ないことであり、彼らはそれを信じていたのである。
4. 彼らの信仰、神様への信頼が彼らの神様への服従を支えていたのである。
  - (1) 私たちの信仰人生において「神様への信頼」と「神様への服従」は車の両輪である。
  - (2) 神様が人間の知恵と力、見える現実の事情を越えて、必ず助けて下さると言う信仰、信頼なくして、私たちは神様に従うことはできない。
  - (3) このような信頼の無い人の服従は、所詮は、常識の範囲内、知性で納得できる範囲内の服従であって、聖書の言う「服従」とは程遠いものである。
  - (4) 即ち、聖書的には、信頼無きところには服従もないし、服従の無い信仰も空しいリップサービスである。
  - (5) 今日、メッセージ後の讚美歌の折り返しの部分を、その意味、即ち、「信仰と服従の両輪性」を覚えて歌って頂きたい。Trust and Obey! For there's no other ways to be happy in Jesus

### 結 論

- 先週も強調したが、クリスチャンとは、イエス様によって世から救い出された者である。
- しかし、同時に、クリスチャンは、イエス様によって世で仕え、働き、生きるように、世の光、地の塩としての使命を頂いて、世に遣わされたものである。
- ダニエルとその友人たちも、バビロンと言う異教の世に、しかも、その中心地である王室に直に仕える立場を与えられた。それは、彼らが異教の快樂を楽しむためではなかった。
- それは、そこでも、自らの信仰を貫き、証し人としての使命を果たすためであった。
- そのためには、神への信頼に支えられた神のみ言葉への服従に生き続けなければならない。